

特別企画講演

8月30日（水） 11:00-12:30 大会場A（4階）

研究戦略を前進させるには： 目的達成に向けた実行(Do)のための計画(Plan)、 改善(Action)のための確認(Check)へのMetricsの活用を目指して

現在、日本の大学は、大学ランキングにみられるような大学外部からの“metrics”により可視化される機会が多い。加えて、特に日本の国立大学においては、大学運営から大学経営への変革が今まで以上に社会から求められており、大学は外部に対して、そして内部において“metrics”と向き合う場面が急速に増加してきている。具体的には、様々な研究戦略を立案する際にも、「数値目標」の設定を含む計画立案(Plan)や、その達成度の確認(Check)という場面において、多くの“metrics”を活用しようとする動きが出てきている。

しかしながら、“metrics”による可視化に対しての国内のセンシビティの上昇、“metrics”の導入へのいわばプレッシャーの上昇が非常に短期間で強くなったことで、「我々はどのようにこの“metrics”に向き合い、研究戦略を前進させていけば良いか」の議論を成熟させることなく、“metrics”を活用に踏み切らざるを得ない状況となっている。その結果、計画立案(Plan)や達成度の確認(Check)における“metrics”の活用が自己目的化し、その先に前進することを意識した“metrics”の検討や活用のための取組へと十分繋がっていないのではないかと懸念する。

そこで、本セッションでは、様々な分析結果を用いて、“metrics”から何を読み取り、そこから実行(Do)や改善(Action)といった実際の活動につなげる際に見るべき視点を、どのように抽出するかという思考プロセスを共有したい。具体的には、国、大学、部局、研究チームレベルで見た日本の研究活動の状況について概観した後、大学や分野の特徴によって研究経営で考えるべき視点が変わりうる点を問題提起する。つづいて、それを踏まえて、大学で“metrics”をどのように向き合うか、大学で本当に必要な“metrics”とは何かについて考察したい。

オーガナイザー



阪 彩香：大阪大学 経営企画オフィス URA部門
特任准教授／リサーチ・マネージャー

東京大学大学院新領域創成科学研究科 博士課程修了、博士（生命科学）
博士号取得後、2004年より、文部科学省科学技術・学術政策研究所にて勤務。
計量書誌学的アプローチを用いた日本や主要国の研究力モニタリング、ベンチマーキング手法の開発、世界においてホットな研究領域の抽出手法の開発等に従事。
2016年11月に大阪大学経営企画オフィス着任。

司会者



池田 雅夫：大阪大学 総長特命補佐
特任学術政策研究員／シニア・リサーチ・マネジャー

1971年大阪大学工学研究科通信工学専攻修士課程修了、1973年～1995年神戸大学システム工学科に勤務、1995年～2010年大阪大学工学研究科機械系の教授として制御工学の教育と研究に従事。2005年度計測自動制御学会会長。2010年より大阪大学URA。2013年8月から2年間、副学長（URA担当）。2015年よりリサーチアドミニストレーター協議会副会長。

講演者



伊神 正貫：科学技術・学術政策研究所
科学技術・学術基盤調査研究室 室長

カーボンナノチューブやグラフェンの研究を経て、2002年から科学技術政策研究に従事。博士(工学)。日本の科学技術の現状や現場の声を政策立案の場に届けるべく、科学技術システムの定点観測、科学における知識創出プロセスの分析、科学研究のマッピングなどを実施。最近の関心事項は、科学知識が生み出されるプロセスの理解とそれに基づくインセンティブ設計、研究活動からみた日本の大学システムの生態系の理解、人文・社会科学の成果測定など。